中観派エナクティブ認知

—— エナクティブ認知における「生と死」の統合的考察 ——

Madhyamaka Enactive Cognition: An Integrative Study of “Life and Death” in Enactive Cognition

木邑　寿秀（Kimura Toshihide）

独立研究者（Independent Researcher）

Corresponding Author: shouxiu30@gmail.com

アブストラクト

本稿は、エナクティブ認知科学、とりわけラディカル・エナクティビズム（REC）が「死」に対して構造的な沈黙を強いられているという問題を出発点とする。REC は認知を現に活動している身体に等置するがゆえに、活動停止後の痕跡や意味の継承を記述する論理的空間を欠く。本研究はこの空白を、中観派哲学、とりわけプラサンギカの二諦論（勝義諦・世俗諦）を応用することで埋めることを目的とする。『中論』第十一章の論理分析により、生と死が時間的関係として成立しないことを勝義諦レベルで示したうえで、世俗諦レベルにおいて生と死を「縁起的相互依存の中で仮設（prajñapti）として生成される境界」として再定式化する。境界生成（boundary-making）と仮設の二層モデル、および痕跡（trace）の概念を導入することで、個別認知から集合的認知へと射程を拡張し、死を消失ではなく縁起的関係構造の再編成として記述する。この枠組みは、実体主義と虚無主義の双方を退ける中道的な死生観の理論的根拠を提供するとともに、固定された基盤を要求しない「根拠なき世界」における理論構築という、ヴァレラが晩年に提起した課題への応答でもある。

キーワード：中観派・二諦論、仮設（prajñapti）、縁起・相互依存、境界生成、エナクティブ認知、ラディカル・エナクティビズム（REC）、死生学、中道

Abstract

This paper takes as its starting point the structural silence that radical enactivism (REC) is compelled to maintain with respect to death. Because REC equates cognition with the currently active body, it lacks the logical space to describe the traces and inheritance of meaning that persist after biological activity ceases. The aim of this study is to fill this gap by applying Madhyamaka philosophy, particularly the Prāsaṅgika two-truths

doctrine (paramārtha-satya and saṃvṛti-satya). Through logical analysis of Mūlamadhyamakakārikā chapter XI, the paper demonstrates at the level of ultimate truth that birth and death cannot arise as temporal relations. At the level of conventional truth, birth and death are then reformulated as "boundary-making as prajñapti (conventional designation) within pratītyasamutpāda (dependent origination)." By introducing a two-layer model of boundary-making and conventional designation, together with the concept of trace, the framework extends its scope from individual to collective cognition, describing death not as disappearance but as a dynamic reorganization of relational structure within dependent origination. This framework provides a theoretical grounding for a middle-way understanding of life and death that refuses both substantialism and nihilism, and constitutes a response to Varela's late proposal: the task of inhabiting a groundless world without demanding foundations.

Keywords: Madhyamaka, two-truths doctrine, prajñapti, pratītyasamutpāda, boundary-making, enactive cognition, radical enactivism, thanatology, middle way

第 1 章　序論 —— エナクティブ認知の死生学的拡張

問題の所在：生への饒舌と死への沈黙

「生にはこれほど饒舌なエナクティブ認知科学は、なぜ死に対してはこれほどまでに寡黙なのか」。本稿はこの根源的な問いから出発する。

1991 年のヴァレラらによる提唱以来、エナクティブ認知科学は生命を自己産出的なオートポイエーシス・システムとして描き、環境との相互依存を通じた「意味生成（sense-making）」の主体として饒舌に語ってきた。そこでは生命が自らの境界生成を行い維持する動的プロセスが、生命現象の本質として精緻に記述される。

しかしその理論的関心が「生存」の維持と境界の形成に偏る一方で、対極にある「死」については記述の停止あるいはシステムの外部として扱われ、理論的な空白地帯となっている。特に、認知から内的表象を徹底的に剥ぎ取り直接的な感覚運動的相互作用に限定するラディカル・エナクティビズム（REC）の立場において、この傾向は顕著である。REC は「内容なき（contentless）認知」を標榜し、現に活動している身体に認知を等置するがゆえに、活動が停止した後の「痕跡」や「意味の継承」を記述する論理的空間を構造的に欠落させており、死に対して必然的な沈黙を強いられている。

この「構造的沈黙」は偶然の欠落ではない。REC が認知から「内容」を剥ぎ取ったことで、かえって活動停止後に持続する痕跡・意味・関係の記述という論理的空間をも失ったのである。本研究が出発点に置くのは、この構造的問題の認識である。

本研究の目的：プラサンギカ的二諦論による「生死」の再定式化

本研究の目的は、エナクティブ認知のこの「空白」を、中観派哲学、とりわけプラサンギカ（帰謬論証派）の二諦論（世俗諦・勝義諦）を応用することで埋めることにある。

本稿では、三枝充悳・梶山雄一・桂紹隆・立川武蔵・清水高志ら日本人研究者による文献学的に精緻な『中論』解釈を基盤とし、ガーフィールドやトンプソンらの分析哲学的解釈も参照しながら議論を展開する。具体的には、『中論』第十一章（生死の検討）および第二十四章（四諦の検討）を軸とし、エナクティブ認知が記述するすべてのプロセスを「世俗諦」として位置づけ直す。

主張の核心は次の一点に集約される。生と死は独立した実体（自性）ではなく、中観派の説く「仮設（prajñapti）」であり、連続的な縁起のプロセスにおける「仮設の転換」である。縁起を単なる因果の連鎖としてではなく、関係が項に先立つという意味での（対象の成立そのものが関係に依存するという）相互依存の構造として解釈し直すことで、死を「消失」ではなく「縁起的関係構造の動的再編成」として捉える枠組みが成立する。これにより、エナクティブ認知の射程を個体の死を超えた広範な生命プロセスへと拡張する。

研究の方法と論文の構成

研究方法は経験的分析ではなく理論的再構成である。第 2 章で理論的枠組みを整備し、第 3 章で『中論』第十一章の否定的論証および第一章一偈（四句分別）・第二十四章十八偈を軸とした肯定的再構成を行い、第 4 章で生と死を境界生成と仮設の二層モデルとして再構成し、第 5 章で縁起・相互依存の観点から拡張し、第 6 章で結論を総括する。

第 2 章　理論的枠組み —— 成立・境界生成・縁起

三概念の整理

本章は、生と死を再定式化するための概念装置を整備する。従来の理解では対象は自立的に存在するものとして捉えられるが、本研究は「成立（arising）」という概念を採用する。成立とは、対象が独立に存在することではなく、特定の条件のもとで成り立つことを指す。問いは「存在するか否か」ではなく「どのように成立するか」である。

次に、認知を「境界生成（boundary-making）」として捉える。この立場においては、認知の基本単位は対象ではなく、あるものを他のものから区切る動的プロセスである。境界生成はオートポイエーシス的な自己産出と直接対応し、固定的な境界として与えられるのではなく条件に応じて成立し変化する。対象はあらかじめ存在するものではなく、境界生成によって現れる。したがって認知は対象の把握ではなく境界生成の過程である。

これらを統合する概念が「縁起（相互依存）」である。縁起とは諸要素が互いに依存しながら成立する構造を指す。重要なのは、先に述べたように縁起が単なる因果の連鎖ではなく、「関係が項に先立つ」相互依存の関係構造を意味する点である。主体や対象そのものの成立が関係に依存する。この点で本研究の縁起理解は一般的な「相互作用」と区別される。

三概念の統合と二諦の位置づけ

三つの概念は同一の現象を異なる側面から捉えたものである。対象が成立するとは境界生成が成立することであり、その境界生成は縁起の中で生成される。したがって、生と死は縁起の中で成立する境界生成であり、固定的な対象ではない。

これらの概念は後続の分析において二方向から活用される。第３章では、この枠組みが前提とする成立条件そのものが勝義諦レベルで否定される。第４章以降では、その否定を受けた世俗諦レベルでの再定式化がこの概念装置を用いて展開される。二諦の動的関係こそが、否定から再構成へと至る本研究の方法論的骨格をなす。

エナクティブ認知が記述するすべてのプロセス —— 境界生成・意味生成・感覚運動的相互依存 —— は、本研究において世俗諦レベルの記述として位置づけられる。これにより認知科学の記述的有効性を保持しつつ、その哲学的基盤を中観派の論理によって精密化するという方向性が確立される。

表１　二諦の層構造と本稿の扱い

	世俗諦（**saṃvṛti-satya**）	勝義諦（**paramārtha-satya**）
内容	言語・慣習・経験の次元における縁起的仮設	空性（śūnyatā）そのもの
成立様式	相互依存的関係において機能的に成立	言語・概念の到達しえない次元
本稿での位置づけ	エナクティブ認知科学全体・死の概念的記述	指示するが語らない（明示的徹底）

第３章　生と死の非成立 ――『中論』の論理構造

第十一章：生と死の時間的関係の否定

論証の目的と位置づけ

本節は、生と死が時間的関係として成立しないことを論理的に示す。ここで示される否定は「生と死は存在しない」という主張ではなく、「生と死を時間的出来事として理解する枠組みが勝義諦レベルで成立条件を欠く」という主張である。世俗諦レベルでの再定式化は、この否定を受けて第４章以降で展開される。

命題：生と死は時間的関係として成立しない。

完全分岐による論理構造

生と死を時間的関係として理解する場合、その関係は論理的に以下の三つのいずれかに属する。（１）生が死に先行する（生 → 死）、（２）死が生に先行する（死 → 生）、（３）生と死が同時に成立する（生 ‖ 死）。これは時間的関係の定義から必然的に導かれる完全分岐である。したがって三つがすべて否定されれば、生と死を時間的関係として定義すること自体が不可能となる。

三関係の否定

（１）先行関係（生 → 死）の否定

先行関係が成立するためには、生と死がそれぞれ独立した出来事として確定していなければならない。しかし死が生に依存せずに成立するとすれば「何が死んでいるのか」が確定できない。逆に死が生に依存して成立するとすれば、死はすでに生の中に含まれており先行関係を構成する二項性が失われる。「生があるから死がある」という理解は両者を独立した項として前提しているが、この前提そのものが成立しない以上、この構造は論理的に維持できない。

（２）後行関係（死 → 生）の否定

生が死に依存せずに成立するとすれば、死との関係を排除した生はその定義基盤を失い「何が生きているのか」が確定しない。逆に生が死に依存して成立するとすれば「死んでいるものが生じる」という構造が必要となるが、死が成立している時点でその対象はすでに「終わっている」ものとして定義されており、その後に生が成立する基盤が存在しない。後行関係（死 → 生）もまた成立しない。

（３）同時関係（生 ‖ 死）の否定

同時関係が成立するためには、生と死が同一の時間点において成立していなければな

らない。しかしこのとき、生と死を区別する根拠が失われる。差異を導入しようとすれば、その差異はすでに生と死を区別する基準として機能しており、それは同時成立の前提と矛盾する。同時成立を主張するにはあらかじめ区別基準が導入されていなければならないが、その基準の存在は同時成立の前提を破壊する。

結論の位置づけ

時間的関係の三可能性がすべて否定されたことにより、生と死を時間的関係として定義すること自体が不可能であることが示された。この結論は二諦の枠組みにおいて勝義諦のレベルに属する。固定的実体（自性）を前提とした時間的理解は究極的真理のレベルでその根拠を持たない。

第一章一偈と第二十四章十八偈：四句分別と縁起・空性・仮設

第一章一偈「四句分別」の論理

『自らも、他からも、両方からも、無因からも、どこにおいても、いつにあっても、もろもろのものは生じない。』（訳：立川武蔵『中論講義』上、11 頁より）

四句分別とは、ある命題についての四つの可能な肯定・否定の組み合わせを網羅的に検討し、いずれも成立しないことを示す分析操作である。帰謬論証が「ある特定の自性的前提の矛盾を示す」のに対し、四句分別は「いかなる固定的命題も対象を捉えられない」ことを網羅的に示す。これを「死」に適用すると以下の表２のようになる。

表２　四句分別の構造と「死」への適用

句	命題の形式	「死」への適用
第一句	X は（自性として）存在する	死は実体的事象として存在する → 否定
第二句	X は存在しない	死はまったく存在しない → 否定
第三句	X は存在しかつ存在しない	死は存在しかつ存在しない → 否定
第四句	X は存在するのでも存在しないのでもない	第四句も固定化であり成立しない → 否定
帰結	（四句いずれも不成立）	死は生との相互依存において仮設としてのみ成立する

四句のいずれによっても「死」を固定的に捉えることはできない。この帰結は第十一章の否定的論証と整合しており、勝義諦レベルにおける実体的把握の不可能性を別角度から確認するものである。

第二十四章十八偈：縁起・空性・仮設・中道の同値

『いかなる縁起であれ、われわれはそれを空であると説く。それは何かを原因（因）として仮名にあずかることであって、それが即ち中道に等しいのである。』（訳：清水高志『空の時代の「中論」について』413 頁より）

この偈は『中論』の根幹をなす最重要の偈の一つである。縁起・空性・仮設（仮名）・中道という語彙が一偈の中に同時に現れ、それらを同値として提示するところに本偈の核心がある。本稿では、これら四語を相互に言い換え可能な同値として解釈する立場を採用する。

「空であるからこそすべてが成立する」—— この逆説が本研究の論理的要として機能する。勝義諦の否定（第十一章・第一章一偈）は世俗諦での成立を妨げず、むしろそれを要請する。この移行が第４章の課題となる。

第４章　生成としての再構成 —— 境界生成と仮設の二層モデル

否定の意味の精密化

第３章が否定したのは「時間的系列としての成立」であり、「生と死が一切成立しないこと」ではない。この区別は決定的に重要である。中観派の中道的態度とは、実体主義（生への固定的執着）と虚無主義（死による無化）の双方を退け、条件依存的な成立様式を記述することにほかならない。本章は第３章の否定を積極的に再構成し、世俗諦レベルにおいて生と死がいかなる様式で成立するかを理論的に定式化する。

仮設（**prajñapti**）による概念的成立

生と死の成立様式を記述するために、仮設（prajñapti）の概念を導入する。仮設とは、ある対象が自立的に存在するのではなく、特定の条件のもとで名づけられ区切られることによって成立することを意味する。仮設は任意に導入されるのではなく、一定の条件構造に依存して成立する点で条件依存的かつ関係的である。これはゲルク派やプラサンギカの文脈において「対象を仮に立てること（安立）」として論じられるものと対応する。

この観点を生と死に適用する。生は特定の条件のもとで導入される仮設された境界であり、死もまた特定の条件のもとで導入される仮設された境界である。条件とは、生理的状態・環境との縁起的相互依存・社会的規範・認知的枠組みなど多層的な要素を含む。仮設としての生と死は世俗諦レベルにおける有効な記述として機能する。仮設は実体的成立（自性）を持たないが、条件依存的に機能するという意味で世俗諦における真理として認められる。

境界生成（**boundary-making**）の導入

仮設概念により生と死の存在論的立場は明確になったが、「どのように生成され続けるか」という動的過程の記述がなお不足している。この補完のために境界生成（boundary-making）を導入する。境界生成とは、縁起的条件のもとで差異を成立させる動的過程を指す。オートポイエーシス的な自己産出において生命が自らの境界を絶えず生成・維持するプロセスと直接対応し、エナクティブ認知の語彙と中観派の仮設論を架橋する概念として機能する。

重要なのは、境界生成を名詞としてではなく動詞的プロセスとして、すなわち「生成（making）」として理解することにある。境界は固定的構造ではなく生成過程として位置づけられる。それは「あるもの」ではなく「起こること」であり、この理解により境界概念に付随する実体性は排除される。

境界生成は以下の最小構造を持つ。縁起的条件、差異の成立、項の出現（結果として現れる）の三要素が同時的に成立する。すなわち生・死といった項は境界生成の結果として現れるものであり、先行的に存在するものではない。また境界生成は再帰的である。成立した境界は新たな境界生成の条件となり、境界生成 $_1$→ 条件 $_2$→ 境界生成 $_2$→……という連鎖が展開される。固定的な始点を持たないこの構造は、第 3 章における「始点（生）の否定」と整合する。

二層モデルの確立

境界生成と仮設の関係を整理する。境界生成は差異構造を成立させ、仮設はその差異構造を概念的に名指す。仮設は境界生成に依存するが、境界生成そのものではない。境界生成（生成過程）→ 差異構造の成立 → 仮設（名指し）という一方向的依存関係が成立する。

中観派の核心概念との対応を示す。「空性（自性なき縁起）」は境界生成が実体的基盤を持たないことに対応し、「縁起」は境界生成が条件依存的に連鎖することに対応し、「仮設（prajñapti）」は生成された境界に概念的名称が付与されることに対応する。二諦の観点からすれば、境界生成と仮設はともに世俗諦レベルの動的記述体系に属し、いずれも自性を前提とせず勝義諦による否定と矛盾しない。

生と死の二層的理解

このモデルを生と死に適用する。境界生成レベルでは、生は死との差異として生成され、死は生との差異として生成される。生と死があるから差異があるのではなく、差異が生成されることによって生と死が現れる。仮設レベルでは、生と死という語はこの差異構造に対して与えられた仮設である。両者は同一の縁起的構造に依存し、独立

した対象ではなく単一の生成過程の異なる表現である。

時間の再定義と最小定式

時間を出来事が配置される外在的枠組みとして想定する従来の理解は、第３章で示された通り崩れる。本研究において時間は以下のように定義される。

時間とは、境界生成が連続的に成立する縁起的構造である。

時間は独立に存在するものではなく、境界生成が成立することによって成り立つ。この連続は単純な直線ではなく、縁起的条件は複数の経路から与えられるため境界生成は分岐・収束を含む。過去・現在・未来は境界生成の記述に用いられる仮設であり、独立した時間領域ではない。以上の議論を統合した最小定式を導出する。

生と死は、境界生成の連続として成立する縁起的時間構造において、条件に依存して現れる差異であり、それらは仮設として名指される。

この定式は第３章（勝義諦的否定）・仮設による再定義・境界生成モデルを矛盾なく統合し、生成性・連続性・条件依存性・非実体性の四要素を含む。

第５章　拡張 —— 縁起的相互依存と痕跡

個体中心モデルから縁起的相互依存へ

第４章では境界生成と仮設の二層モデルにより生と死を動的過程として再構成した。しかしこの段階ではなお、境界生成の成立場が暗黙に「ある個体」に帰属するものとして理解されている可能性が残る。本章の目的はこの制限を解除し、生と死の境界生成が個体に閉じず縁起的相互依存の関係構造の中で展開されることを示すことである。

境界生成は孤立して成立するものではない。各境界生成は他の境界生成の結果に依存し同時にそれらの条件となる。境界生成が連続するためには、その結果が何らかの形で保持される必要がある。この保持機構が痕跡（trace）である。複数の境界生成が痕跡を介して相互依存的に関係する場合、構造は線形連続から分岐・収束・再帰を含む縁起的相互依存の網の目へと拡張される。

痕跡の概念

痕跡とは、ある境界生成の結果として残存する効果であり、後続の境界生成に縁起的条件を与えるものを指す。痕跡は単なる「過去の残り」ではなく、現在の境界生成に日々のあらゆる営みの中で積極的に関与する。したがって痕跡は境界生成の結果であ

り、同時に新たな境界生成の条件となる。

痕跡は多様な形態をとる。個体レベルにおける記憶、文化・制度レベルにおける記録、環境レベルにおける物理的変化、相互行為の履歴としての社会関係 —— これらはすべて境界生成の履歴であり、同時に新たな境界生成の条件として機能する。第４章で定義した境界生成の連続は、この痕跡の連鎖として具体化される。

生と死の痕跡的理解

死の再定義

従来、死は「終わり」として理解されてきた。しかし痕跡の観点から見ると、死と呼ばれる境界生成が成立した後も、その痕跡は縁起的関係の中で残存し続ける。したがって死は以下のように再定義される。

死とは、境界生成の停止ではなく、縁起的関係における痕跡の再配置である。

死は消失ではなく構造変化である。この再定義は第４章の最終定式と整合し、REC が構造的に記述できなかった「活動停止後の意味の継承」を、痕跡の縁起的連鎖として記述する論理的空間を開く。

生の再定義

生もまた固定的状態ではない。生とは、痕跡の連鎖が特定の形で維持される状態であり、それは常に再生成される過程であり境界生成の継続的展開として理解される。

個体の仮設的地位と縁起の網の目

縁起的相互依存の観点において、個体は基礎単位ではない。個体とは、縁起の網の目の中で一時的に安定した境界生成の結果として理解される仮設にすぎない。境界とは境界生成によって成立する暫定的構造であり固定的な線ではない。境界生成は縁起的関係の中で連鎖するため、境界は個体内部に閉じず外部へ拡張し、重なり合い、条件に応じて再構成される。

個体中心モデルの解体は虚無主義的帰結を意味しない。世俗諦レベルにおいて個体は依然として実践的に有効な仮設的記述単位であり、本研究が退けるのは個体を自性的に成立する基礎実在として固定することであって、仮設としての個体の機能的有効性ではない。

個別認知から集合的認知へ

縁起的相互依存の枠組みは、個別認知と集合的認知を違和感なく接続する論理的基盤を提供する。個体の境界生成と社会・文化的境界生成は、同一の縁起論理によって記

述される。医学的基準（脳死・心停止）、法制度（死亡認定）、宗教的理解（死後観）はいずれも、縁起的条件として仮設された生と死の区切りであり、仮設の条件構造の集合的な現れである。

個体レベルでの境界生成が変化した後も、痕跡は社会的に持続する。記録（戸籍・文書）、記憶（他者の認知）、文化的表象（儀礼・物語）はすべて境界生成の継続である。「死後」という概念は、痕跡が異なる形で維持される縁起的状態として再解釈される。

第５章段階における再定義

死とは、終点ではなく、縁起的相互依存における関係構造の再編成である。

生とは、縁起の網の目において、特定の境界生成が維持される過程である。

この定義は非終点性・構造変化性・非個体性・連続性・多層性の五点を含意し、RECが構造的に沈黙していた「個体の死後」の記述を、縁起的痕跡の観点から可能にする。

第６章　結論 —— 中道的な死生観と理論的意義

各章の統合と最終結論

本研究は、エナクティブ認知が「死」に対して強いられる構造的沈黙を出発点として、生と死を時間的系列として理解する従来の枠組みの成立条件を問い直し、縁起的仮設として再定式化した。第２章で提示した成立・境界生成・縁起の三概念は、第３章における勝義諦レベルの否定的論証および四句分別・第二十四章の肯定的再構成を経て、第４章・第５章において世俗諦レベルの動的展開として結実した。

これらの議論の統合により、本研究の最終結論は以下のように定式化される。

生と死とは、時間的出来事でも個体的属性でもなく、縁起的相互依存において条件に基づき生成される仮設的境界である。

この結論は以下の命題群を含意する。第一に、生と死は時間的関係として成立しない（勝義諦レベルの否定）。第二に、生と死は条件依存的な仮設として成立する（世俗諦レベルの再定式化）。第三に、生と死は境界生成の過程である（動的モデル）。第四に、生と死は縁起的相互依存の中で展開される（拡張モデル）。第五に、死は関係の再編成である（非終点的理解）。これらは相互に依存しており、勝義諦による否定（命題１）と世俗諦による記述（命題２～５）は「不一不異」の動的関係として統合される。

理論的意義

REC の構造的限界への応答

ラディカル・エナクティビズムが「内容なき（contentless）認知」を標榜したことで死に対して沈黙せざるを得なかった構造的問題に対し、本研究は縁起的痕跡の連鎖という論理的空間を開くことで応答した。これは中観派の「空であるからこそすべてが成立する」（第二十四章十八偈）という逆説の、認知科学的文脈への適用である。

存在論的転換

固定的実体を前提とする存在論を転換し、対象ではなく成立様式を基礎とする立場を提示した。これは中観派的存在論の現代的展開として位置づけられる。

個別から集合へ：縁起による一貫した記述

縁起・相互依存という単一の概念枠によって個別認知と集合的認知を違和感なく接続した点は、本研究の方法論的特徴である。個体・社会・文化の各レベルにおける生と死の記述が、同一の縁起論理のもとで統合される。

二諦による統合

本研究の最も重要な理論的貢献は、勝義諦（否定・空）と世俗諦（仮設・生成）を二諦の論理によって統合したことにある。「否定したものを再び肯定する矛盾」という批判を、中観派の正統な二諦の動的関係として学術的に正当化した。この統合が、否定的論証から出発して肯定的記述へと展開する本研究の方法論的核心をなす。

中道的な死生観の倫理的意義

本研究が提示する枠組みは、理論的再構成にとどまらず、死生観における実践的・倫理的含意を持つ。中道的態度とは、実体主義（生への固定的執着）と虚無主義（死による無化）という両極端を避ける立場である。

生への実体主義的執着は、生を自性的に固定された価値として把握することから生じる。しかし生は自立的実体ではなく縁起の中で仮設される境界生成である。この理解は生への執着を概念的に解体する根拠を与える。他方、死への虚無主義的理解は死を絶対的終点として把握することから生じる。しかし本研究は死を縁起的関係構造の再編成として記述し、痕跡の連鎖が縁起の網の目の中で継続することを示した。この理解は死を「無」として把握する虚無主義を概念的に解体する根拠を与える。

この中道的枠組みは現代社会の具体的課題にも哲学的基盤を提供する。医療倫理における脳死・尊厳死の議論では、固定的境界ではなく縁起的関係に基づく柔軟な合意形成の指針となる。グリーフケアにおいては、死を消失ではなく痕跡の再配置として捉え直す視点が新たな論拠となり得る。さらに AI・技術倫理においては、生命の非固

定性を前提とすることで人間と AI の境界が流動化する未来の評価軸を提示する。

限界と今後の課題

本研究には明確な限界と今後の課題が存在する。

中観解釈の文献学的限界として、サンスクリット原典への直接参照とインド学的精査が必要である。本論文は日本人研究者による研究業績を参照したが、十分理解したとは言い難い。限界を自覚した上でさらなる研究が必要である。

今後の課題として、以下の三点が考えられる。

言語と認知の接点をめぐる問題である。立川武蔵は『空の構造』において、龍樹の言語観に即して次のように述べている。「業と煩悩は『思惟』から生じ、その思惟は言語的展開より生ずるとされ、言語表現が不可避的に有する多元的要素への『分裂』が強調される。」この指摘は、中観派の言語観と現代のトランスフォーマー・アーキテクチャが共有する構造的視点を示唆するものとして注目される。両者が相照応するとき、そこにいかなる仮設が生じ、いかなる縁起が展開されるか —— この問いは、本研究の理論的枠組みを言語・AI 研究へと接続する重要な論点となり得る。

言語化以前の認知の問題として、縄文文化の認知様式を取り上げることができる。アブダクションによる推論に帰謬と中道の論理を導入し、縄文人の認知構造へと迫る試みは、本研究の射程を先史的次元へと拡張するものである。

仏教文化・古典文学・茶の湯など日本の歴史文化全体に色濃く残る中道の痕跡、および西田幾多郎・和辻哲郎・柳宗悦ら近代思想家に内在するエナクティブな痕跡の探求は、縁起の流れの中に忘却された認知的資源を蘇らせ再生成するという意味でも、本研究の射程を豊かに拡張しうるテーマである。これらについては、今後の課題として取り組む予定である。

本研究の最終的な射程は、西洋科学的思考が前提とする「基盤の要求」を問い直すことにある。固定された根拠を必要とせず、縁起的相互依存の中で理論を展開しうることを示すこと —— これがヴァレラの提起した課題であり、本研究の向かう方向でもある。

結語

本研究は、エナクティブ認知の「構造的沈黙」という問いから出発し、生と死の成立条件を徹底的に再検討した。生と死は固定的な出来事ではなく、縁起的相互依存の中で仮設として生成される境界であり、縁起の網の目の中で再編成される関係として理解されるに至った。

この転換を支えるのは、勝義諦（空・否定）と世俗諦（仮設・境界生成）を二諦の論理で統合するという方法論である。否定は成立を妨げず、成立は否定を覆さない。この動的関係の中に、中道的な死生観の理論的根拠が宿っている。

参考文献

三枝充悳訳注（1984）『中論 —— 縁起・空・中の思想』上・中・下、第三文明社.

梶山雄一・上山春平（1997）『空の論理〈中観〉』角川ソフィア文庫.

桂紹隆・五島清隆（2016）『龍樹「根本中頌を読む」』春秋社.

桂紹隆（2021）『インド人の論理学 —— 問答法から帰納法へ』法藏館文庫.

立川武蔵（2003）『空の思想史 —— 原始仏教から日本近代へ』講談社学術文庫.

立川武蔵（2024）『空の構造 ——「中論」の論理』講談社学術文庫.

立川武蔵（2024）『中論講義』上、法藏館.

立川武蔵（2025）『中論講義』下、法藏館.

清水高志（2025）『空の時代の「中論」について』IAAB EDIT.

中村元（2002）『龍樹』講談社学術文庫.

Nāgārjuna, Mūlamadhyamakakārikā, ch. XI & XXIV（三枝充悳・桂紹隆・立川武蔵・清水高志訳・参照）.

Varela, F. J., Thompson, E., & Rosch, E. (1991). *The Embodied Mind: Cognitive Science and Human Experience*. MIT Press.（田中靖夫訳『身体化された心 —— 認知科学と人間の経験』工作舎、2001 年）.

Thompson, E. (2017). *Why I Am Not a Buddhist*. Yale University Press.（藤田一照・下西風澄監訳、護山真也訳『仏教は科学なのか —— 私が仏教徒ではない理由』Evolving 合同会社、2024 年）.

Garfield, J. L. (1995). *The Fundamental Wisdom of the Middle Way*. Oxford University Press.

Di Paolo, E. et al. (2017). *Linguistic Bodies: The Continuity between Life and Language*. MIT Press.

Hutto, D. & Myin, E. (2013). *Radicalizing Enactivism*. MIT Press.

用語解説

本論文で使用する主要概念について、本研究における定義と用法を以下に記す。

【中観派の概念】

勝義諦（**paramārtha-satya**）／世俗諦（**saṃvṛti-satya**）—— 二諦

中観派が採用する二層的真理論。勝義諦とは究極的な真理の水準を指し、本研究では「いかなる対象も自性（自立的実体）を持たない」という否定的論証のレベルに対応する。世俗諦とは日常的・機能的真理の水準であり、本研究では縁起的条件のもとで仮設として成立する生と死の記述が機能するレベルに対応する。二諦は「不一不異（同一でもなく別異でもない）」の動的関係にあり、勝義諦による否定は世俗諦レベルでの成立を妨げず、逆に世俗諦の成立は勝義諦の否定を覆さない。この動的緊張こそが本研究のメタ理論的骨格をなす。プラサンギカ（帰謬論証派）においては、この二諦論が最も徹底的に展開される。

仮設（**prajñapti**）

サンスクリット語 prajñapti の訳語。「仮に設立すること」「名指しによって成立させること」を意味する中観派の核心概念。対象が自立的・実体的に存在するのではなく、縁起的条件のもとで概念的に名指されることによって成立するという存在様式を指す。ゲルク派・プラサンギカの文脈では「安立（あんりゅう）」とも呼ばれ、「対象を仮に立てること」として論じられる。本研究においては、生と死がそれ自体として存在する実体ではなく、特定の縁起的条件のもとで名指しによって成立する仮設的境界であることを示す概念として用いる。仮設は恣意的な命名ではなく、条件構造に依存して成立する点で客観性を持ちながら、実体的基盤を持たない点で空である。

縁起（**pratītyasamutpāda**）／相互依存（**interdependence**）

仏教哲学の根本概念。「縁（条件）によって起こること」を意味し、あらゆる現象は独立した実体としてではなく、他の条件との関係において成立するという原理。本研究では一般的な中観解釈に従い、縁起を単なる因果の縦の連鎖（A があるから B が起こる）としてではなく、「関係が項に先立つ」相互依存の構造として理解する。すなわち、項はあらかじめ存在して関係を持つのではなく、関係の網の目の中で項が成立する。この理解により、生と死は独立した出来事としてではなく、縁起の網の目の中で相互に依存して成立する仮設として記述される。なお本研究では「ネットワーク」という現代語を避け、縁起・相互依存という伝統的語彙に統一する。

空性（**śūnyatā**）

「空であること」を意味し、すべての現象が自性（自立的・固定的実体）を持たないことを指す中観派の中心概念。空性は虚無ではなく、むしろ自性がないがゆえに縁起的変化と仮設的成立が可能となる条件である。『中論』第二十四章十八偈の論理に従えば、「空であるからこそすべてが成立する」—— 空性と縁起は同一の事態の二側面である。本研究では、境界生成が実体的基盤を持たないこと（空性）と、それが縁起的条件のもとで成立すること（縁起）が不可分であることを示す概念として参照する。

不一不異（**non-identity, non-difference**）

中観派が用いる論理的表現。「同一でもなく、別異でもない」という関係を指し、二項が完全に同一でも完全に異なるものでもないという動的な相互依存関係を示す。本研究では、勝義諦（否定）と世俗諦（成立）の関係、および生と死の関係を記述するために用いる。

【エナクティブ認知科学の概念】

エナクティブ認知（**enactive cognition**）

フランシスコ・ヴァレラ、エヴァン・トンプソン、エレノア・ロッシュが 1991 年の『身体化された心（The Embodied Mind）』において提唱した認知科学のパラダイム。認知を外界の表象の操作としてではなく、身体を持つ生命体が環境との相互依存を通じて意味を生成する（sense-making）過程として捉える。認知は受動的な情報処理ではなく、生命体が自らの行為を通じて世界を「行為的に産み出す（enact）」動的プロセスである。オートポイエーシス論を理論的基盤とし、身体性・行為・環境との相互依存を認知の本質的条件として強調する。

ラディカル・エナクティビズム（**Radical Enactivism: REC**）

ダニエル・ハットとエリック・マインが提唱したエナクティブ認知の急進的立場（2013 年）。基礎的な心的状態には「内容（content）」すなわち表象や意味が存在しないという「内容なき認知（contentless cognition）」を主張し、認知を直接的な感覚運動的相互作用に限定する。この立場では認知は現に活動している身体と等置されるため、活動が停止した後の「痕跡」や「意味の継承」を記述する論理的空間が構造的に欠落する。本研究ではこの REC の構造的限界 —— 死に対して必然的な沈黙を強いられること —— を出発点の問題として設定し、中観派の縁起論によってこの空白を埋めることを目的とする。

オートポイエーシス（**autopoiesis**）

ウンベルト・マトゥラーナとフランシスコ・ヴァレラが提唱した生命組織の概念（1980 年）。ギリシャ語の「自己（auto）」と「産出（poiesis）」を合わせた造語。生命システムが自らの構成要素を自己産出・自己維持するという特性を指す。エナクティブ認知において、生命体が自らの境界を生成・維持するプロセスの理論的基盤をなす。本研究における「境界生成（boundary-making）」の概念はオートポイエーシスと直接対応する。

【本研究の構成概念】

境界生成（**boundary-making**）

本研究において新たに導入する概念。縁起的条件のもとで差異を成立させる動的過程を指す。オートポイエーシス的な自己産出において生命が自らの境界を絶えず生成・維持するプロセスと直接対応し、エナクティブ認知の語彙と中観派の仮設論を架橋する。「境界」を名詞（固定的構造）としてではなく、「生成（making）」という動詞的プロセスとして理解する点が核心である。これにより境界概念に付随する実体性が排除される。生と死は境界生成の結果として現れる差異であり、境界生成に先行して存在するものではない。境界生成は再帰的であり、成立した境界は新たな境界生成の縁起的条件となる。

痕跡（**trace**）

ある境界生成の結果として残存する効果であり、後続の境界生成に縁起的条件を与えるものを指す。痕跡は単なる「過去の残り」ではなく、現在の境界生成に積極的に関与する。個体レベルの記憶から、文化・制度レベルの記録、環境レベルの物理的変化に至るまで、多様な形態をとる。本研究において痕跡は、REC が記述できなかった「活動停止後の意味の継承」を縁起的に記述するための鍵概念であり、死を「消失」ではなく「痕跡の再配置」として理解することを可能にする。また境界生成の連続（＝時間）が痕跡の連鎖として具体化される点で、時間概念の再定義とも連動する。

中道（**madhyamā pratipad**）

仏教の根本的な実践的・理論的立場。実体主義（生への固定的執着）と虚無主義（死による無化）という両極端を避ける態度を指す。本研究においては、勝義諦による否定（生も死も自性を持たない）と世俗諦における成立（生と死は縁起的仮設として機能する）を同時に保持することが、理論的な中道の具体的な内実をなす。ヴァレラが『身体化された心』末尾で述べた「根拠なき世界を建設し、そこに暮らすという新たな作業」は、この中道的立場の実践的表現として本研究は理解する。

謝辞

本論文の執筆過程において、文章表現の明確化および論理構成の整理を目的として生成 AI を補助的に利用した。本論文の責任はすべて著者に帰属する。